

フィードバックアンケート



フィードバックアンケート

国際シンポジウム、専門家会議、ワークショップの終了後、交流事業に参加した国内外の日本美術専門家を対象としてフィードバックアンケートを実施した。

国際シンポジウムについて

- ・ COVID-19 というテーマはタイムリーで適切だった。
- ・ 逆境に直面して生み出された前向きなプロジェクトと成果について学べたのはとても刺激的だった。
- ・ シンポジウムでは、博物館がパンデミックの課題にどのように創造的に対応しているか、バーチャルで連携する役割がどのように拡大したか、さらに博物館を超えてコミュニティーとのつながりを強化するための新しい取り組みについて多くの洞察が得られた。
- ・ パネリストとトピックの選択は非常にバランスが取れていた。参加者全員の意見交換はできなかったが、回答者とのマンツーマンの質疑応答もよかった。
- ・ それぞれの発表は素晴らしく、シンポジウムの技術的な側面もよかった。
- ・ バーチャル環境で、世界中からより多くの人々が議論に参加することができた。
- ・ 美術館の、デジタルでの新たな取り組みとつながりについて学ぶことができてよかった。
- ・ コロナ禍において、人々の「デジタルニーズ」がどのように進化してきたかを考えさせられた。
- ・ コロナウイルスによって国境が閉鎖され、旅行が制限された新しい時代の中で、日本美術専門家の仲間と連絡を取り合うことができたのは非常に重要だった。
- ・ 基調講演は、日本美術のアイデンティティのルーツについての反省を促した。
- ・ シャオチン・ウー博士の、日本の作品をさまざまな宗教的伝統に関連する作品と一緒に展示していることに関する発表は特に興味深かった。彼女の経験は、特定の地域の芸術の歴史全体を示すことを可能にし、他の文化の文脈の中で利用可能な作品を示すコレクションを持たない美術館にも参考になる。
- ・ 一貫性があり、興味深い講演だった。
- ・ 他の美術館の仲間が同様の問題にどのように対処したかを聞くことは非常に役に立った。特に、アaron・リオ博士とウィブケ・シュラーペ氏の報告は興味深いものだった。
- ・ 発表を聞いて、地域内で専門家との連携を求め、彼らにアドバイスを求めることが必要だと刺激を受けた。すべての発表者が、さまざまな方法で、つながりを持つために努力をしていることが伝わり、興味深かった。
- ・ オンラインで集まってアイデアを交換する方法を考えてくれてありがとう。
- ・ ライブでの発表ができれば、よりシンポジウムに参加しているように感じられたと思う。特に発表の後に、質問や議論の機会があればよかった。
- ・ 実行委員会が現在の制限の下でこのシンポジウムを開催し、バーチャルではあるものの、会って議論する機会を与えてくれたことを嬉しく思う。

専門家会議について

- ・ 専門家会議は素晴らしかった。おそらく長い自粛生活のせいで、参加者は共通の関心のあるトピックについてのアイデアや考察を交換することに特に意欲的であるように見えた。
- ・ オンライン形式という制限がある中、不確実な時代に直面している重要な問題や困難に他の美術館がどう対処しているかきけてよかった。
- ・ 日本美術専門家同士の話し合いはいつも刺激的で、皆様の顔を見ることができ、世界の状況がどうであれ、私たち全員がまだそこにいることを知ることで勇気づけられた。
- ・ 美術館の持続可能性のトピックは非常に重要であり、メンノ・フィツキ氏の発表は示唆に富むものだった。
- ・ コメントや議論に時間が足りなかった。
- ・ 正式な会議が終了した後、非公式に話す機会がもう少しあればよかった。
- ・ 日本で対面しての交流までの間、オンラインでの近況報告ができるのではないかと（ウェブ会議で発言可能な参加者と視聴のみ可能な参加者がいたことに対して）
- ・ ウェビナー形式はよかったが、関係者全員が直接参加できるわけではないのは残念だった。チャット機能を使って視聴者がより直接的に関与できるようにしてはどうか。
- ・ 「閲覧のみ」の参加者から質問やコメントをもらう機会があればもっと良かった。

ワークショップ動画について

1. 文化財取扱講座（彫刻）

- ・ 作品を移動したり、取り扱う正しい方法を確認したりすることは有意義だった。動画は分かりやすく有益だった。
- ・ 卓越した動画で、大変多くの情報を得られた。
- ・ 彫刻を扱う機会がある登録部門、保存修復部門の同僚と共有した。
- ・ 同様の作品についての質問に答えるとの東京国立博物館の申し出は非常に寛大だった。
- ・ 日本国外で日本の文化財を扱う知識や経験を積むことは難しいので、専門家から（録画をとおしてでも）学ぶ機会を得られたことに本当に感謝する。
- ・ 日本彫刻の一流の専門家による取扱解説と、作品の帰属を特定するのに役立つ重要な事項に言及した浅見龍介氏と彼の若い助手に特に感謝する。
- ・ 最も興味深かったのは、台の大きさと木の種類を考慮に入れるという、彫刻の年代測定の方法についてのコメントである。
- ・ 年代、技術、様式についての識別について聞くのはためになった。
- ・ アートハンドラーと共有したい。
- ・ 私もそこにいられたらよかったのに。

2. 鎌倉エクスカージョン

- ・ 通常は一般の人が立ち入りできない場所を見ることができて光栄だった。
- ・ 僧侶たちが寺院の空間や物をどのように理解し、解釈するかについて聞いたことで、美術史で

は網羅できない仏教美術の物語に別の視点を加えられる。

- ・このビデオを見て、パンデミックが終わったらすぐに日本に旅行したくなった。
- ・寺院や非公開の作品の中には、初めて見るものもあった。
- ・完璧な英語の字幕があってよかった。
- ・専門家のコメントは本当に作品を理解するのに役立った。二人とも、非常によく作品の特徴を明確かつ正確に指摘していた。
- ・本来の場所で仏像を見ることができ楽しめた。
- ・日本がとても懐かしくなった。
- ・野菜スープ（けんちん汁）に挑戦したい！
- ・坐禅のやり方や禅料理のレシピは興味深かった。
- ・坐禅の説明はとても簡潔で刺激をうけた。
- ・この動画を利用して、日常の中に短いインスピレーションの時間をつくりたい。
- ・お菓子を見るとますますそこへ行きたくなった。
- ・直接これが体験できたらいいのに！

来年度事業についてのコメント、提案（シンポジウムテーマ、専門家会議の議案など）

- ・現在、米国での大きな議論の1つは、学問と社会的活動の促進における美術館の役割に関するものである。来年度事業のテーマは、日本、ヨーロッパ、北米の美術館が、学問と研究の必要性和、地域コミュニティと関わり、社会正義の問題を推進するよう呼びかける活動とのバランスをどのように取るかということかもしれない。
- ・持続可能性や展覧会の分野の発展について。たとえば、コロナ禍が去った後に旅行が再び可能になったとしても、長期的にクーリエの旅行を減らすかなど。
- ・将来の博物館連携協力のための戦略と枠組み
- ・リソースの共有：巡回展と共同スポンサー
- ・サステナビリティの問題は再討議したいが、もう少しこの用語を明確に定義し（「持続可能性」とは正確には何を意味するのか）、議論をいくつかに分割する必要がある。分割する小項目としては、1) 気候変動と温室効果ガスの生成を緩和するための取り組み 2) 収蔵品を劣化（紫外線への露出、作品の頻繁な移動に伴う危険など）から保護するための取り組み 3) デジタルテクノロジーを使用した収蔵品をオンライン提示（作品を巡回展に出品および／または、印刷物制作の代わり）、が挙げられる。
- ・一般的な博物館学、特に日本の美術史の本質的な植民地主義的側面について。日本社会のさまざまな立場の人々が私たち学芸員の多くが日本美術作品を日本から持ち出し、海外のコレクションとして保存しているという事実について、どのように感じているか、私たちは知っているか。最近の美術品返還の事例があるか、また日本からきた作品の処分に関する法律と倫理的懸念の間に格差があるか。
- ・観覧者の社会的あるいは文化的多様性を高める方法（「美術館はすべての人のためのものでなければならない」）。
- ・異文化交流を紹介する展覧会と展示（過去と最近の歴史を通して）。

- ・それぞれのコレクションがどのように展示され、ラベル付けされるかについての議論。来館者の期待は何か。